

息子の忠告聞き流す

穴水市 60代 女性

うちは畳の上にジュウタンを敷いていて、置いていた家具が全部倒れてしまいました。板の間に比べると畳は少しフワフワしているから、よけい倒れやすかったようです。

正直、地震なんて1000分の1も思っていないませんでした。自分のところには地震は来ないと思っていたので、阪神・淡路大震災の神戸の人たちを気の毒やなあと思っていただけでした。整理ダンスの上とかに書類を入れたカラーボックスをいくつものせていて、息子から「地震がきたら全部落ちるぞ」と言われていたのに。

地域でいろいろ活動してきたけれど「今まで口先だけやったなあ」と反省しました。防火のために風呂場の水を捨てないでおくとかはやっていましたが、家具は固定しておかなければならなかったんです。



カーナビのテレビ見て情報収集

柏崎市 30代 女性

防災無線で、「これから水が止まります」という放送が入ったときには、すでに断水していて、水をためることもできませんでした。地域で差があるんだろうとは頭でわかっているけど、「この放送は一体なんだろう」という感じでしたね。「これから」というのに水が出ないんですから。

電気も止まってしまい、夜は懐中電灯だけが頼りでしたが、中越地震の苦い経験から、単1とか単3とかよく使う電池はいっぱい買っておくようにしていたので、今回は大丈夫でした。

うちの車にはカーナビがついていましたので、カーナビのテレビを見ながら「あっ、こんなにひどいことになっているんだ」なんて言っていました



蓄積される災害対応ノウハウ

柏崎市 40代 男性 会社員

天井のボードを落としたりする業務は専門じゃないとできませんから、いわゆる土建屋さんをとにかく最初に入れて、ある程度落としてから、落ちたものを片づける作業を従業員にやってもらいました。それも危険がないわけじゃないんですけども、十分に注意した上でということをお願いしました。

総務としては、片づけ作業に必要なゴミ袋やバケツ、ブルーシートの準備はもちろんですが、断水で洗濯ができないので、毎日新しいものに取り替えられるよう、マスク、軍手、タオルなどは大量に用意しました。

初日に業者さんに何百人と入ってもらえたのは、やっぱり工務のほうで日ごろのいろいろなつき合いの中から、連絡が常にとれる業者というのをある程度把握していたからだと思います。

また、簡易トイレを50個用意したのですが、ちょうどあの時期は夏祭りなどのイベントが多く、大多数が押さえられているんですよ。ですから近隣の長岡市とかではまず無理だということで、すぐに新潟市の業者に電話をしました。

こういった段取りなんかは、先の新潟県中越地震の経験がベースになっていることは確かだと思っています。



やっぱり帰ってきてよかった家族一緒

島原市 50代 男性

避難所の集団生活は、プライバシーがないから、神経がつかれて、2、3日で頭がキーキーいう感じになりました。

ようやく自分の家に帰れることになって、ようすを見にいくと、家の中は火山灰がどっさり積もっていて、とても住める状態ではありませんでした。

噴火が始まって5年目に、家のリフォームをしてから、長男やよそに避難させていたおばあちゃんを呼びもどしました。「お母さん、もう大丈夫だよ、ここにずっと住むからね」と言って、その晩は、家族がまた一緒に生活できるようになったことを喜びあいました。

やっと戻れた自分の家だから、もう、よほどのことがないかぎり避難したくないと思いました。



「すぐ終わると思った体育館の避難」

島原市 50代 男性

平成3年の6月に大火砕流 ※ が起きて、体育館に避難したものの、「いっときたてば終わるだろう」と思っていました。

しかし、わたしたちの地域が警戒区域（立入制限区域）に設定されてからずっと延長、延長でね。「8月のお盆には」と思っていたのにダメで、「それなら正月には帰れるだろう」と思い直したけれど、それもないままでした。もう、その時点で、なかばあきらめましたね。

警戒区域さえ解除になれば、家の荷物でも何でも持ち出せると期待していたのだけれど、そうこうしている間に、今度は土石流 ※ が起こって被害が拡大していきました。

自分の仕事をしたくても、建築資材や道具をとり帰ることもできない。長引く避難生活で、そのときの経済的なダメージが今でも残っています。

※火砕流は、高熱の火山岩塊、火山灰、軽石などが高温の火山ガスとともに山の斜面を流れ下る現象で、流下速度は時速100キロメートルを超えることもあります。



※土石流とは、谷に積もった石や土砂、火山灰などが長雨などによって大量に流出するもの。数十トンもある大きな岩でさえ石ころのようにおし流してしまうほど大きな破壊力を持っています。

一日前プロジェクト みんなでやってみよう！

ー簡単な手順を紹介しますー

まず、過去の自然災害（地震、水害等）の中から対象を選ぶ



その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける



みんなが集う場所と時間を設定する ※所用時間は約2時間



なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、
体験したり感じたことを話し合ってもらおう ※話し手は、2人～4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける



テープ起しなどを基に、拾い出した部分を「物語」にする

※物語は、300字～500字程度で、できるだけ語り口を残して編集
※物語の情景を表すイラストや写真等を添えると効果的



作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

